

# 存在の把握

## ——五蘊と界 (dhātu, 要素) ——

村 上 真 完

I 【序】 色・受・想・行・識の五項 (=五蘊) によって、自分の存在を分析して把握するのは仏教の特色である。経文は色等の一々が無常であり苦であり非我であると説くが、その一々を界 (-dhātu, 要素, 内的要素) とも呼ぶ (S. III. pp.9<sup>26</sup>-10<sup>16</sup>, 13<sup>11-22</sup>). 界は 18 界として認識と知覚の全要素を含み、人間存在 (生存) を分析的に把握する。色は四大元素 (地・水・火・風) から成り、地等は界 (要素 dhātu) と呼ばれる。漢訳では安世高以来 dhātu を界という (例: T.15, No.603『陰持入經』p.174b<sup>22</sup>: 三界, 同 c<sup>22-3</sup>: 欲界・色界・無色界)。漢字の界は「さかい, しきり, 境域; かぎり, 限界; さかいのうち, 世界」等を意味する (諸橋轍次『大漢和辞典』)。

II 【問題の所在】 20 余年前に松本史朗は dhātu-vāda (基体説) という造語をもって如来蔵思想を評釈して、「如来蔵思想は仏教にあらず」と論じた。彼によれば dhātu は「置く場所」を原義として、基体とか locus を意味し、dhātu を locus (基体) とし、諸法をその上に載る super-locus (超基体) として図示し (松本 1989『縁起と空』pp.5, 67), 仏教批判の視点とする (松本 2004『仏教思想論上』pp.30,32)。袴谷憲昭も松本に倣い (1989『本覚思想批判』p.232), 維摩経の真如や法界や空性を同様の dhātu と見ながら、「場所 (topos) としての真如」 (同 p.303) といい、場所の意味を強調する。両氏によると dhātu は縁起説とは相容れない。しかし平川彰 (1988『縁起と空』第 6 章「縁起と界」) は dhātu の、因、性質、種類等の意味を指摘し、縁起と界との関係を考察している。さて dhātu は諸法を載せる基体や諸法を含む場所ではなくて、寧ろ諸法に内在するのではないか。

III 【界と縁起と諸法との関係】 縁起と縁生法 (縁起している諸要素) とは㊦「因縁相応」第 20 経 (S.XII.20 Paccayo: II, pp.25-27), 『雜阿含』卷 12 (296 因縁, T.2.84bc), ㊧本 (Chandrabbālī Tripathi, *Fünfundwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Berlin 1962, Sūtra 14 : pratitya, pp.147-152) に説かれる<sup>1)</sup>。㊦文は世尊の語としていう (S.II. p.5<sup>17-23</sup>)。

「そして比丘達よ、縁起とはいかなるものか。比丘達よ、生の縁から老死がある (jāti-paccayā bhikkhave jarā-maraṇam)。諸如来が出現しても、或いは諸如来が出現しなくて

も、その界（内的要素，本性 dhātu）はもう定まっており，法として定まっていること，法として決定していること，これを縁とすること（此縁性）である（*ñhitā va sā dhātu dhamma-ñhitatā dhamma-niyāmatā ida-ppaccayatā*）。

それ（縁起，or 縁）を如來は現に覺り了解する．現に覺り了解して説き示し，定め確定し開示し解説し明瞭にし，そして「お前たちは」見よ，という（*taṃ tathāgato abhisambujjhati abhisameti, abhisambujjhitvā abhisametvā ācikkhati deseti paññāpeti paṭṭhapeti vivarati vibhajati uttanī-karoti passathāti cāha*）．」

と．続いて乃至「... 無明の縁から諸行がある」と同文の趣旨で，「諸如來が出現しても」云々（*S.II. pp.25<sup>31</sup>-26<sup>3</sup>*）と繰り返してから，

「比丘達よ．無明の縁から諸行がある．比丘達よ．以上，まことに，凡そそこにおける，そのようであること（如性，真如），そのようでないのではないこと（不虛妄性），別様ではないこと（不異性），これを縁とすること（此縁性）．比丘達よ．これが縁起といわれる（...*yā tatra tathatā avitathatā anaññathatā ida-ppaccayatā, ayam vuccati bhikkhave paṭicca-samuppādo*）．」（*S.II. p.26<sup>4-6</sup>*）

と結ぶ．ここで縁起とは「生の縁から老死がある」乃至「無明の縁から諸行がある」という関係のようである（が⑨註釈では縁起は縁を指す）．その関係が「界（内的要素，本性 dhātu）」，「これを縁とすること（此縁性）」，「真如（如性 tathatā）」，「縁起」と呼ばれる．漢訳『雜阿含』卷 12 (296 因縁) (*T.2.84b<sup>13</sup>*) は縁起を因縁法と呼び，「謂此有故彼有．謂縁\_無明\_行，縁\_行識，乃至如是如是純大苦聚集」（84b<sup>14-16</sup>）と示す．ここは十二縁起を因縁法と呼ぶようで，もしそうなら縁起を法（ことわり，理）と見ていることになる．縁生法とは無明・行等であるから，無明・行等は法（要素）である．けれども「諸如來が出現しても」云々という文は無明・行等という縁生法について述べている．⑨本（*Sūtra 14.3, p.148<sup>1</sup>*）も漢訳と同様に縁起の関係を無明から始めて説いてからいう．

「諸々の如來が現れても，或いは現れなくとも，無明を縁として諸行がある，というこの法性は法の確定のための界（内的要素，本性）である（*avidyā-pratyayāḥ saṃskārā ity utpādād vā tathāgatānāṃ anutpādād vā sthitā evēyaṃ dharmatā dharma-sthitaye dhātuḥ*）．それ（縁起，or 縁）を如來は自ら知り覺って説き，定め確定し解説し開示し明瞭にし，示し顕らかにする．すなわち無明を縁として諸行があり（*taṃ tathāgataḥ abhijñāyābhisambuddhyākhyaṭi prajñāpayati prasthāpayati vibhajati vivarati uttanī-karoti deśayati samprakāśayati yaduta avidyā-pratyayāḥ saṃskārāḥ*）．」『雜阿含』：云何縁生法．謂無明，行．若佛出世．此法常住．法住法界．彼如來自所覺知．成\_等正覺\_．為\_人演說．開示顯發．謂縁\_無明\_有\_行 *T.2.84b17*）．

と．そして同様の文を省略してから，「生を縁として老死がある」といって上と

同文を繰り返してから、次のように結ぶ。

「凡そそこにおける法であること（法性）、法の確定性、法の決定性、法の如実にそのようでないのではないこと（不虛妄性）、別様ではなく真実に真諦であること、真実であること（真実性）、如実に逆ではないこと、顛倒していないこと（不顛倒性）、これを縁とすること（此縁性）、縁起に随順すること。これが縁起といわれる。」（Sūtra 14.6: p.149a<sup>1-7</sup>: yatra dharmatā dharma-sthititā dharma-niyāmatā dharma-yathā-tathā avitathatā ananyathā bhūtaṃ satyatā tattvatā yāthātathā aviparītatā aviparyastatā idaṃ-pratyayatā pratitya-samutpādānulomatā ayam ucyate pratitya-samutpādaḥ. 『雜阿含』: 此等諸法。法住・法空・法如・法爾。法不離如。法不異如。審諦真實。不顛倒。如是隨順縁起。是名縁生法。 T.2. 84b<sup>22-4</sup>)

と。漢訳における縁起の理解が⑤とは僅かに異なるようで、十二縁起全体が縁起であるのか、各2項間の因果関係なのか明確ではない。⑤は⑤と同様に縁起を法とはせず、縁起の述語は全て女性形の抽象名詞とする。縁起は界（内的要素、本性）である。これは基本になる本性であり内在する要素であろう（⑤本では縁起は法性 dharmatā でもある）。⑤註釈（Sāratthapakāsinī = SA.II, p.40<sup>19-20</sup>）は

「<その界（本性、内的要素）はもう定まっております>とは、その縁の本性（自性）はもう定まっております、決して生が老死の縁でないことがない（*ṭhitā va sā dhātū ti ṭhito va so paccaya-sabhāvo, na kadāci jāti jarā-maraṇassa paccayo na hoti*）」

といって、界（内的要素、本性）を「縁の本性」と解する。本性（⑤ svabhāva）とは、自性即ち固有の性質・本質である。縁とは生から無明までの各支分で、法（諸法、存在の諸要素）とも呼ばれる。縁の本性（界）は、縁（生…無明）の中に内属している。生には「生の縁から老死がある」という因果関係を可能にする本性・本質があり、無明には「無明の縁から諸行がある」ということを可能にする本性・本質がある。ここでは界という基体に生や無明が載っているとか、或いは界という場所に生や無明が含まれているのでもない。松本がいうように界が諸法を上に乗せる基体であるとか、袴谷のように諸法を内を含む場所であるとかいう理解は、成立しない。また⑤註釈はいう。

「<法として定まっていることであり、法として決定していることであり>という二[語]によっても、同じ縁を語る。なぜなら縁によって縁から生じた諸法が定まる（存立する）ので、それゆえに同じ縁が「法として定まっていること」といわれる。縁は諸法を決定するので、それゆえに「法として定まっていること」といわれる（～*ṭhitatā* ～*niyāmatā* ti imehi pi dvīhi paccayam eva katheti. paccayena hi paccay'uppannā ～ā tittḥanti, tasmā paccayo va ～*ṭhitatā* ti vuccati. paccayo ～e niyāmeti, tasmā ～*niyāmatā* ti vuccati).

」(SA.II, p.40<sup>20-24</sup>, ～は dhamma の略)

縁中心に解釈すると、上の法も理ではなくて諸法（存在の諸要素）である。また

「<これを縁とすること（此縁性）>とは、これら老死等の諸縁は、これを縁とする。これを縁とすることとはこれを縁とするに他ならない (*ida-ppaccayatā ti imesaṃ jarā-maraṇādināṃ paccayā ida-ppaccayā, ida-ppaccayā va ida-ppaccayatā*).」 (SA.II. p.40<sup>24-26</sup>).

「老死等の縁から、或いは縁の集合から<これを縁とすること（此縁性）>といわれる。そこではこれ（次）が語の意味である：これらの諸縁がこれを縁とするのである (*jarā-maraṇādināṃ paccayato vā paccaya-samūhato vā ida-ppaccayatā ti vutto. Tatr'ayaṃ vacan'attho: imesaṃ paccayā ida-ppaccayatā*).」 (SA.II. p.41<sup>8-10</sup>)

と。後世（12世紀）の複註（*Ṭīkā*）類は、*ida-ppaccayatā* は *ida-ppaccayā* であり、*-tā* は無意味か、集合を意味する、という。すなわち

「<これを縁とすること（此縁性）>とは、これを縁とするのである、という *tā* という音によって語が重音化する。例えば *devatā*（神格）というの *deva*（神）に他ならないように。これを縁とする複数のものの集合がこれを縁とするのである、という *tā* という音は集合を意味する。例えば *janatā*（人々）というの *janā* の集合であるように (*ida-ppaccayā eva ida-ppaccayatā ti tā-saddena paḍaṇṇaṃ yathā devo yeva devatā ti, ida-ppaccayānaṃ samūho ida-ppaccayatā ti samūhattho tā-saddo yathā janānaṃ samūho janatā ti*).」 (SA<sup>Ṭīkā</sup> Vri.2.43)<sup>2)</sup>

「<これを縁とすること（此縁性）>とは、これを縁とするのである。例えば *devatā*（神格）は *deva*（神）に他ならないように。或いはこれを縁とする無明等の自分の結果に縁って縁であること＝[結果を] 発生することが出来ることがこれを縁とすること（此縁性）である (*ida-ppaccayā eva ida-ppaccayatā yathā devo yeva devatā, ida-ppaccayānaṃ vā avijjādināṃ attano phalaṃ paṭicca paccaya-bhāvo uppādana-samatthatā ida-ppaccayatā*).」 (VinA<sup>Ṭīkā</sup> Vri.3.140)<sup>3)</sup>

例えば「老死等はこれ（生）を縁としている」ので、老死等が結果となることに縁<sup>よ</sup>って、生は老死等の縁である。縁起は、経本文では「生の縁から老死がある」乃至「無明の縁から諸行がある」という二項間の因果関係にも解されようが、④註釈では縁起は縁であるので、縁（因）の持つ果を生ずる力（可能性）を含意する（平川前掲書 p.579 参照）。その関係（or その力）がまず「界（原理、本性 *dhātu*）、法として定まっていること（*~tthitatā*）、法として決定していること（*~niyāmatā*）、これを縁とすること（*ida-ppaccayatā* 此縁性）」と呼ばれる。⑤本では縁起は『法であること（法性 *dhammatā*）、法の確定のための界（本性、内的要素 *dhātu*）』とも呼ばれる。ここで縁起が界（内的要素、本性 *dhātu*）であり、法性である。松本・袴谷説は成り立たない。次に縁起によって生じた（縁生の）諸法について、⑥文はこういう。

「そして比丘達よ、縁起によって生じた（縁生の）諸法とはいかなるものか。比丘達よ、老死は無常であり、有為（作られたもの）であり、縁起によって生じたものであり、衰尽の性質（法）があり、衰滅の性質（法）があり、離貪の性質（法）があり、止滅の性質（法）がある（*jarā-maraṇaṃ bhikkhave aniccaṃ saṅkhatam paṭicca-samuppannam khaya-~m vaya-~m virāga-~m nirodha-~m*）。」（S.II. p.26<sup>7-10</sup>）

次に生、有、…無明についても同文を繰り返す趣旨である。要するに縁起によって生じた法（縁生法）とは、十二縁起を構成する老死から無明にいたる各支分を指し、縁起によって生じた（＝縁生した）要素（法）は、無常である云々と繰り返す。十二縁起の各支分は法（存在・生存の要素）と呼ばれる。

法と縁起との関係については、⑨『中部』第28経「象跡喻大経」（M.28 Mahā-hatthipadopama-sutta）に、世尊の語として、舍利弗が述べたという立言がある。

「凡そ誰でも縁起を見るものは法を見る。凡そ誰でも法を見るものは縁起を見る」（*yo paṭicca-samuppādam passati so ~m passati, yo ~m passati so paṭicca-samuppādam passati*. M. I. pp.190<sup>37-</sup>, 191<sup>27-</sup>; cf. 『中阿含』巻7（30 象跡喻經）T.I.467a<sup>9-, 19-</sup> 若見縁起便見法。若見法便見縁起。）。

ここでは五取蘊（執着となる五種の集合体＝色・受・想・行・識）が縁起によって生じたもの（縁生）であり、五取蘊に対する欲求・執着・愛着・固執が苦の集起〔する原因〕であり、それらの欲求・貪欲の制御（調伏）；欲求・貪欲の捨断が苦の滅〔の原因〕である、と説く文脈である。⑨註釈によれば「縁起を見る」とは「諸縁を見る」であり、「法を見る」とは「縁起によって生じた（縁生の）諸法を見る（*paṭicca-samuppanna-~e passati*）」のである（MA. II. p.230<sup>10-1</sup>）。⑨の伝統はこの法を真理の意味とは見ない。縁起は諸縁（存在・生存の諸条件）であり、法が縁起によって生じた（縁生の）諸法（存在・生存の諸要素）であり、「法を見る」とは「縁起によって生じた諸法」を見るのである。法とは我々の存在・生存を構成する要素であろう。

法を見る者は仏を見る、という。⑨「蘊相応」（S.XXII.87 Vakkali, S.III. p.120<sup>28-31</sup>）には病めるヴァッカリ尊者を見舞った世尊の語に、こういう。

「V. よ。よいかね。誰でも法を見る者は私（仏）を見る。誰でも私（仏）を見る者は法を見る。V. よ。なぜなら、法を見つつ私（仏）を見、私（仏）を見つつ法を見るからだ。」（*yo kho Vakkali ~m passati so mam passati, yo mam passati so ~m passati. ~m V. passanto mam passati mam passanto ~m passati*）

⑨註釈は法を法身（～-kāya, 教法の集合体）とし、九種の出世間法、即ち九分教と呼ばれる聖教と解するが、内容上は縁生の法と無関係ではあるまい。

後の『稻芊經 (*Śālistamba-sūtra*)』類は、両經文を連ねたようにこう述べる。

「凡そ如何なる比丘でも縁起を見る者は法を見る。誰でも法を見る者は仏を見る。」  
(yo bhikṣavaḥ pratītya-samutpādaṃ paśyati so dharmam paśyati, yo dharmam paśyati so buddham paśyati)<sup>4)</sup>

IV 【無始時來の界】 dhātu-vāda (基体説) の根拠ともなるのが、無始時來の界 (性, 要因 dhātu) を説く「大乘阿毘達磨經」の偈である。

「無始時來の界 (要因, 性 dhātu) が一切諸要素 (法) の依所 (根拠) であり, それが  
あると一切の [輪廻の] 境遇 (趣) があり, 或いは涅槃の証得もある」 (anādi-kālika  
dhātuḥ sarva-dharma-samāśrayaḥ/tasminn sati gatiḥ sarvā nirvāṇādhigamo'pi vā; 玄奘訳: 無  
始時來界一切法等依由, 此有諸趣及涅槃證得; 真谛訳: 此界無始時一切法依止若有諸道  
有及有得涅槃; 勒那摩提訳: 無始世來性作諸法依止依性有諸道及證涅槃果)<sup>5)</sup>

これがアーラヤ識 (最深層の心) や如來藏の証明に引かれる。まず十二縁起の識  
がアーラヤ識であり, 後者なしには十二縁起が成立しないという。

「アーラヤ識とは別の識が [諸] 行を縁とすることはあり得ない。[諸] 行を縁とする  
識がないと [輪廻の] 流転もないことになる (ālaya-vijñānād anyat saṃskāra-pratyayaṃ  
vijñānaṃ na yujyate/ saṃskāra-pratyaya-vijñānābhāve pravṛtter apy abhāvaḥ, *TrBh.* p.37<sup>16-7</sup>).」

玄奘の所伝では, この界は因の義といい (T.31, No.1585, 14a<sup>17</sup>, No.1597, 324a<sup>23</sup>,  
No.1598, 383a<sup>6</sup>), 真谛は体類, 因, 生, 真実, 蔵の五義をいう (T.31, No.1595, 156c).  
前引の⑨經文についての⑨註釈では, 縁起は縁を指し, 縁 (因) が果を生ずる力  
を示唆して, それを界 (内的要因, 本性) と呼ぶ。上掲の偈も同様に理解できるで  
あろう。十二縁起では, 流転分 (肯定的見方, 生觀) が時間的な始原のない輪廻を  
示し, 還滅分 (否定的見方, 滅觀) が, 無明が滅することによって輪廻の生存がな  
くなり, 涅槃に至ることを示す。無明が滅するというのは, 心が無明という煩惱  
(無明漏) 等から解脱するのであり, 解脱しない限り輪廻が続くわけで, ここに心  
の重要性がある。この心 (深層の心, アーラヤ識) が人間存在を構成するあらゆる  
諸要素 (一切法) の依所・根拠であり, これによって輪廻の境涯があり, またこ  
れを翻せば涅槃も可能となる。RGV (宝性論) は『勝鬘經』 (T.12, No.353, 222b) を  
援引して釈義するが, 高崎直道 (1989『宝性論』 p.331,\*3) もいうように, ここに  
縁起説の要点が読み取れる。涅槃に至るとは仏になるのであって, 縁起説は如來  
藏説を含意する。無始時來の界 (内的要素, 要因, 性) は, 縁起しかも縁起関係を  
構成する縁 (因) を意味しながら, 心 (深層の心) の重要性を示唆している。縁起  
は界 (性) とは別物ではない。

(224)

存在の把握 (村 上)

縁起と真如とに関して袴谷は、縁起は真如ではないという議論を展開する<sup>6)</sup>。  
が私は⑨経文が縁起を真如と等置すること (S.II.26<sup>5</sup>) を出発点としたい。

- 1) 袴谷 1985「縁起と真如」(『本覚思想批判』 pp.86-108) のこの類経と後の論書における引用の精査は有用。
- 2) *Nidānavagga-ṭīkā* という。Vri は Vipassana Research Institute, Dhammagiri, Igatpuri, Nasik, India から出ている CD-ROM 版 (Chatttha saṅgāyana CD-ROM version 3, 1999)。
- 3) *Sāratthadīpanī-ṭīkā* という。
- 4) N.Ross Reat, *The Śālistamba-sūtra*, Delhi 1993, p.27 §3. 同経の⑨写本は知られないが、諸書の引用から復元された。ここは Yaśomitra の *Sphuṭārthā Abhidharma-kośa-vyākhyā* (ed. by Unrai Wogihara Part I, p.293<sup>19-24</sup>) にある。漢訳：支謙譯『了本生死經』(T.16, No.708), 闕譯『佛說稻芊經』(同 709), 不空譯『慈氏菩薩所說大乘緣生稻芊喻經』(同 710), 施護譯『大乘舍黎娑擔摩經』(同 711), 失譯『佛說大乘稻芊經』(同 712) に相当文があり、支謙譯は若比丘見緣起為見法。已見法為見我 (T.16.815b<sup>6</sup>)。
- 5) *Vijñaptimātratā-siddhi* (Sthiramati's *Triṃśikāvijñaptibhāṣya=TrBh*) ed. by Sylvain Lévi, Paris 1925, p.37<sup>12-3</sup>, *Ratna-gotra-vibhāga Mahāyānottara-tantra-śāstra* (=RGV), ed. by E.H. Johnston, Patna 1950, p.72<sup>13-4</sup> (末尾は ca), 玄奘訳『成唯識論』卷 3, T.31, No. 1585, 14a<sup>13-4</sup>, 玄奘訳『攝大乘論本』卷上, T.31, No.1594, 133a<sup>15-6</sup>, 世親造・玄奘訳『攝大乘論釈』卷 1, T. 31, No.1597, 324a<sup>19-20</sup>, 無性造・玄奘訳『攝大乘論釈』卷 1, T.31, No.1598, 383a<sup>3-4</sup>, 世親釈・真谛訳『攝大乘論釈』卷 1, T.31, No.1595, 156c<sup>12-3</sup>, 勒那摩提訳『究竟一乘寶性論』卷 4, T.31, No.1611, 839a<sup>18-9</sup>。
- 6) 袴谷「仏教思想論争考」(『駒沢短期大学仏教論集』第 10 号, 2004, pp.149-210) は、諸学説を論評しながら、真如を重視する場所仏教と縁起を重視する批判仏教とを区別する (p.185)。桂紹隆「袴谷・松本両氏の仏教理解に対する若干の異議申し立て」(同第 11 号, 2005, pp.1-18) は議論を整理して、「真如, 法性, 縁起は等置されるので、法性は場所仏教, 批判仏教は縁起という理由が理解できない」と評する (p.15)。それに対して袴谷「思想論争雑考」(同第 12 号, 2006, pp.189-213) は、その等置は「無理だということになるだろう」(p.204) というに止まり、進展がない。

〈キーワード〉 五蘊, 縁起, 界, 真如, dhātu-vāda 批判

(東北大学名誉教授, 文博)